日刊工業新聞
第3種郵便物認可　2016年（平成28年）2月10日・水曜日

不撓不屈（ふとうふくつ）

阿部興業 ②

木とともに事業成長

高付加価値の建具に活路

暮らしに沿って

阿部興業（東京都新宿区）の創業者、阿部清國は1913年（大2）に群馬県で生まれた。浅間高原で過ごした幼少期、鉄道マンだった父に似て、言われたことをうのみにせず理論的に考え、挑戦する子どもで、自然に対する崇敬の念を持っていたという。

群馬県師範学校（現群馬大学）に進んだ後、県内の高崎市で小学校教員となり、37年（昭12）にサイパンに「外地教職員」として赴任した。ただ、食べ物の偏りと飲み水の悪さに、元来の胃弱がたたった清國は体調を崩してしまい、教員を辞めて42年5月に帰国。職を転々としながら45年に終戦を迎えた。

そんな矢先、知り合いが処分に困っていた群馬・下仁田の材木を仕入れて売ってみると、思いの外ヒット。木とともに育った清國は、木を使った事業に関心を示すようになる。

起業を夢見る中、友人が高崎市で家具木工の仕事を始めたと聞き、思いを強めた。「家具よりもっと暮らしに沿った製品は何か」と考えた清國は同年12月、市内に和室建具問屋として阿部興業を興した。障子や雨戸、ガラス戸などの製品をつくり、翌46年に出荷している。

創業者の阿部清國㊧と現社長の阿部清英

東京・新宿に本社

創業の時点で、すでに東京進出を見据えていた。だが父親から反対された。「田舎もんが行くと、やられてしまう」との父の声に「焼け野原となった東京はこれから復興する。建具の需要も伸びるはずだ」とチャレンジ精神を発揮。その年、親戚筋を頼って、新宿に東京事務所を設けた。

「興業はゼロから事業を興す」という意味。株式会社を移転している。

室内ドア輸入

戦後の経済成長により日本の宅地化が進み、木製建具やアルミサッシ、プレハブ住宅も手がけるようになった。しかし73年のオイルショックが、同社に暗雲をもたらす。当時の主材料として用いていたアラスカ材が輸入なければならないと感じていたのだろう」と、現社長の阿部清英は父を振り返る。57年には新宿に本社を移転している。

事をするというビジネスマンとしての原点があった。何としても成長させもある父は、ゼロから仕事を運用して失敗した経験を運用して失敗した経験

ストップとなったのだ。

清英は清國の指示で北米に飛び、仕入れ交渉を展開した。滞在先のニューヨークで出合ったのが、木製の室内ドアだった。早速、輸入を開始。当時住宅の洋風化が進んでいたこともあり、需要の減る和建具に代わる新部材として飛ぶように売れた。アルミサッシは価格面で過当競争に入っていたこともあり撤退した。

木製建具の付加価値を高める戦略に転換したしばらく後に、同社に寄せられたのが国産の木製防火ドアに対するニーズだった。

（敬称略）